

『いじめ問題にどう取り組むか』

朗読者 尾木直樹

19

夏休みや、冬休み、子どもたちが楽しみにしているイベントが盛りだくさん。でもそんな長いお休みの後は、子どもの自殺が増える時期。特に夏休み明けは要注意。私たち教師にとっては心配と不安で胸が痛くなる時期です。

10

「いじめは昔からあった」とか、「いじめられる方も悪い」「子どもはいじめを通して成長する」といった言葉をいまだに耳にしますが、とんでもないこと。いじめは、人が生きる権利に対する重大な人権侵害。いじめる方が100%悪いのです。いじめられた経験は被害者の心に傷を残し、時には対人恐怖症や人間不信となつて一生つきまといまいます。いじめられた本人だけでなく、いじめをした加害者や、いじめを止めることができず傍観してしまった周囲の人たちもずっと自責の念にとらわれて生きることになるの。

20

時代と共にいじめに対する認識も大きく変わってきました。かつては学校も教師も、いじめを子ども同士の不ふざけや遊び、けんかにとらえがちでした。

文部科学省が平成十八年度（二〇〇六年度）、いじめの定義を「加害者側の視点」から「被害者側の視点」にすると変更した

ことは大きな変化だったわね。被害者本人が、つらいなあ、これはいじめだよと感じたら、それはいじめだということ。被害者の側に立つ視点が強調されたのです。

平成二十三年（二〇一一年）に起きたいじめ事件に、私は第三者調査委員会の委員として関わりました。現場に入り、話を聞いていた時、校長室の前の廊下から、生徒たちの低い声が聞こえてきたの。

「尾木ママ、インペーされないで！」。

インペー？

子どもたちが何を言っているのか、最初はわかりませんでした。そうか、あったことをなかったようにしてしまう。そんな一部の大人たちの態度に、子どもたちは強い不安を抱いているんだなって気が付いたの。誰も信用できない。事件が起きた学校現場は、親も子も教師も、不信感の塊でした。

「尾木ママは絶対隠蔽されないから、大丈夫よ」。

私は子どもたち一人一人の手を強く握りました。事実をきちんと子どもたちに伝える。みんなに公表する。そんなあたりまえのことができていなかったのね。

信用できる大人がいる。それだけで、子どもたちは勇気をもたれるのです。私たち大人がいじめ問題の解決に向けて、どこまで真剣に、まっすぐに向き合っているか。それが問われているのです。